# 細川藤孝　謎の出自に迫る

2020/02
横浜歴史研究会
真野信治

*---出自が謎とされる明智光秀を見出した男もまた謎の出自であった---*

今年(2020年)の大河ドラマの主人公は、明智光秀である。その光秀の前半生から深く関わっており、後に強固な姻戚関係でも結ばれていたのが、**細川藤孝(幽斎)**であったことはよく知られている。しかし、この藤孝自身も光秀同様に前半生の動向は必ずしも明らかとは言えない。史料上の初見は『歴名土代』(りゃくみょうどだい)の天文二十一年(1552)の叙任時の記述であり、室町将軍家に仕えていたのは事実であろうと考えられている。また、生まれた年、両親、その周辺などの伝承は比較的多いが、如何せん、いずれも江戸期以降による編纂物(主に肥後藩が蒐集編纂した『綿考輯録』の記述)から窺い知れる情報であり、光秀の出自よりはましだがやはり同時代史料は明らかに乏しい。現在、この編纂物における記述が細川氏の正史として認識されているが、近年、始祖藤孝の出自につき、正史と相反する事実を指摘する論考が出始めた。

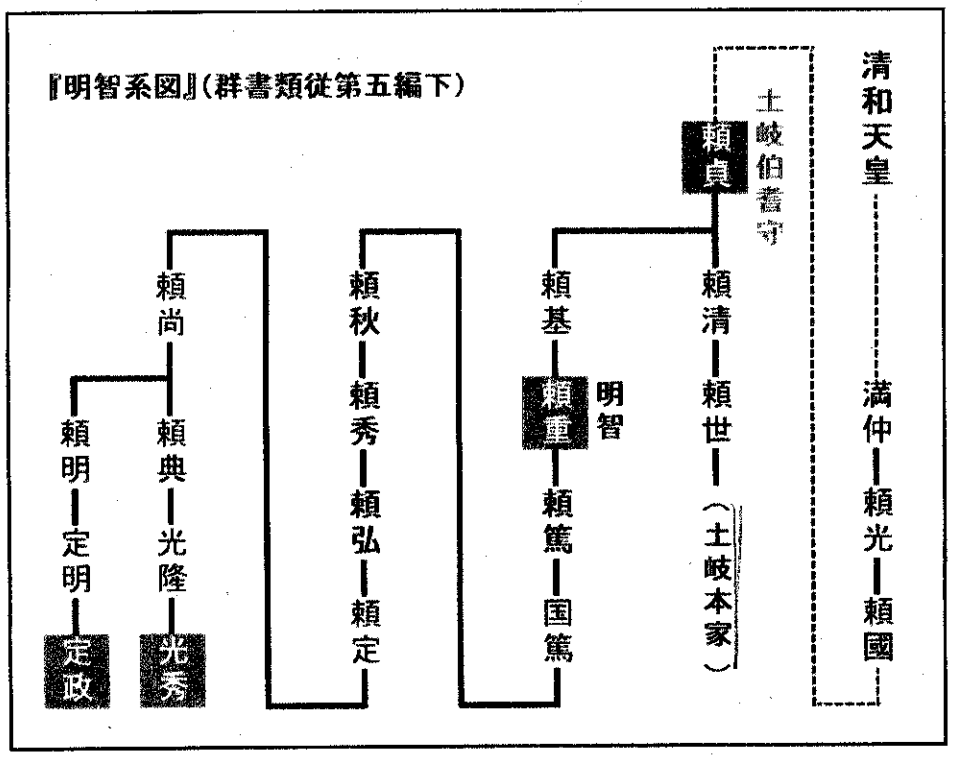
## 藤孝と光秀の関係

資料から窺える二人の関係について『多聞院日記』天正十年六月十七日条に、同時代人の評言として「*細川ノ兵部大夫カ**中間**ニテアリシヲ引立之、云々*」とあるように、細川藤孝の中間であったと当時の人々に認識されていたのである。当時、既に御供衆であった藤孝に比べ、光秀は家格の上で大きな開きがあったことは間違いなく、その藤孝のもとで働くことが多かったことから、世間の人は光秀を中間と言う表現をしたのかもしれない。実際に二人が主従関係であったかどうかは史料がないので不明と言わざるを得ない。また、永禄六年(1563)、足利義昭の家臣名簿『光源院殿御代当参衆并足軽以下覚書』に**足軽衆明智**とあり、近習であった藤孝よりランクは下であることがわかる。そのためか『老人雑話』に「*明智始め細川幽斎の臣也*」と記されている。が実際、光秀は藤孝の家臣ではなく、義昭に直接仕えていたはずである。きっかけは、朝倉義景に仕官していたと思われる光秀が、義景を頼って一乗谷へ逃避してきた義昭・藤孝主従となんらかの接触を持ったのが始まりであると言う。その後、義景が全く動く気がないと分かった義昭に「織田信長を頼ったらどうか？」と声をかけたのが光秀ではないかとされている。その後、光秀の狙い通り信長が義昭を擁立して上洛し、義昭は十五代将軍となった。次いで将軍義昭と信長の二人に仕える「両属」状態であった光秀と将軍直臣藤孝の関係は、徐々に同等の立場になっていったと思われる。そして藤孝が、義昭没落後に信長に仕えた時点では、既に織田家臣として十分に実績があった光秀との関係は完全に逆転していた。ただ、そうなってもお互いは以前のまま仲のいい関係を保持していたことも想像がつく。

## 系図史料から見た明智氏

「時(土岐)は今・・・」の句から連想できる通り明智氏は土岐氏の一族というのが定説である。江戸中期に上野国沼田藩主であった土岐明智氏、その初代定政が明智光秀と同族であることを憚って一時母方の叔父の姓である菅沼を名乗っていた時期がある。この状況が物語るように、明智氏が土岐一族であったことはほぼ間違いない。系図史料から俯瞰すると、土岐氏から分立している数多くの庶流の中に確かに「明智」と名乗る家がいくつか見える。その中で光秀までを詳細に記した系図はあるにはあるが、一つとして同じ内容のものがない。したがって、光秀の系が確実に土岐氏に繋がる系統であるかどうかは簡単に判断は出来ない。原因として、極悪人扱いであった光秀を憚り、江戸期に入ると土岐一族関係の系図や文書が様々な箇所で意図的に削除(抹殺)されてしまったことが考えられ、その影響は非常に大きい。

ただ、その中で「群書系図部集」所収の『明智系図』はその奥書に「*慈父光秀尊霊五十廻忌為追福修善*」とあり、光秀の実子が書き記したものであることがわかる。これは『寛政重修諸家譜』より二百年近く古いもので、現状では一番信用度が高い系図史料と言える。この実子とは、妙心寺塔頭で僧の玄琳であると言われている。通覧すると、土岐家九代頼貞の孫·**頼重**は足利家所収の文書に「*明智彦九郎殿*」とあるので、頼重の実在は間違いない。ここから明智と名乗る氏族が起こったわけであるが、その子の十郎頼篤以下·頼秋·頼秀·頼定の代までも正式な文書にその痕跡が残っており、これらはほぼ間違いない添付史料であると思われる。したがって、頼定から光秀までの系図を傍証する史料が実在すれば、完ぺきな明智氏の系図が出来上がることになる。しかし、現状では十分な裏付けがとれる史料があるとは言えない。




父光隆については玄蕃頭を名乗るが、他に光綱とするものもあり一定しない。光秀自身は、享禄年間に濃州多羅城に誕生とあり、常に文道を学び、射術を得、剣術の妙であり、槍・薙刀の達人であったことも記す。これらは『兼見卿記』など当代の史料と合致する。また、父光隆の従兄弟である定明並びにその正室に関し「土岐系図」でも確認できることから、この辺りは概ね信頼できる。ただ、実弟の信教が後の筒井順慶であると記されており、これは俄かには信じられない。このような記述がこの系図の信頼性を貶めているが、検討材料にはなり得る。他に異色と思えるものに東京大学史料編纂所蔵の『明智氏一族宮城家相伝系図書』がある。この系図が伝えているのは、光秀が山岸勘解由信周の次男であり、実母の兄である明智光綱の養子になったということである。この点はどう判断してよいかわからないが、山岸信周を西美濃十八人衆の山岸光信と混同しているようにも思え、そう考えると、信周は架空の人物である可能性があり、光秀養子説も安易に同調は出来ない。

## 定説となっている細川藤孝の出自

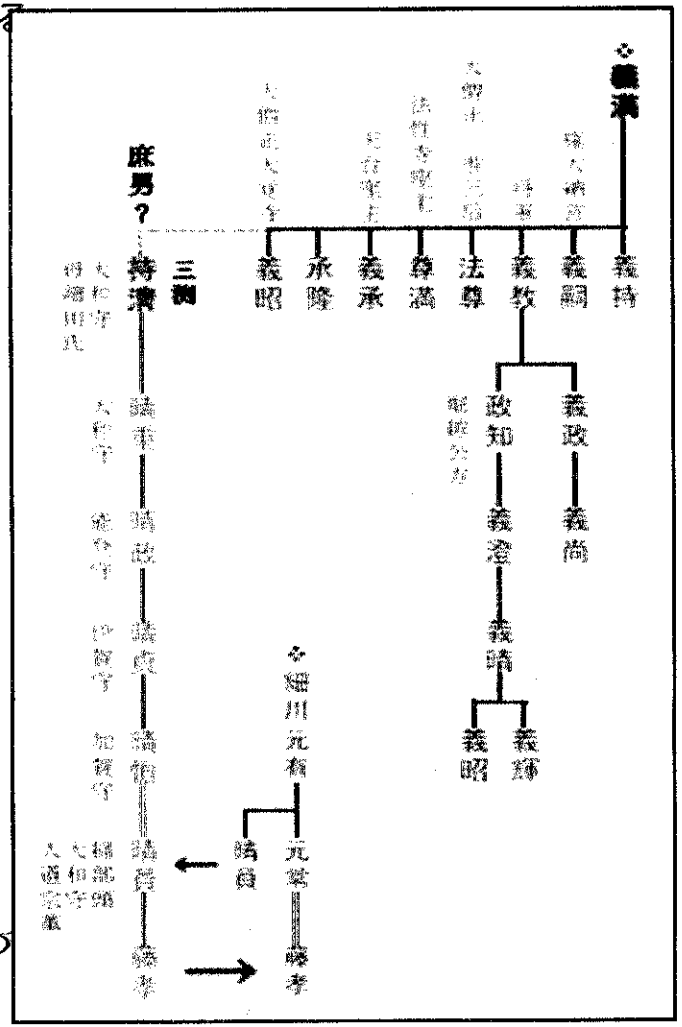
現在、定説となっている細川藤孝の具体的な出自は以下の通り。

◆**生年：天文三年(1534)4月22日**京都東山に生まれる。幼名万吉、後に与一郎と称す。

◆**父母**：父は**三渕掃部頭晴員**(伊賀入道宗薫)、母は清原宣賢の娘(智慶院)。父晴員は和泉上守護家細川元有の実子で、三渕晴恒の養子となったというのが定説である。一方、母智慶院は将軍足利義晴の子をみごもったまま晴員に嫁いで藤孝を生んだという噂があり、事実ならば足利義輝、義昭の庶兄にあたる。が、この落胤説は享保年間に成立した『細川全記』にのみ記される伝承であり、他に傍証史料がないため俄かには信じられない。

◆**養父；和泉上守護家細川刑部少輔元常**(『寛政重修諸家譜』による)。実父の晴員が元有の子であれば、藤孝は伯父の養子になったことになる。一方で『寛永諸家系図伝』では元常の父刑部少輔元有の養子とされている。仮に元常の養子であったとすると、元常には元春と晴貞と言う二子が確認されており不自然である

◆**生い立ち**：天文九年(1540)七歳で元常の養子となり、天文十五年(1546)将軍・足利義藤(後の義輝)の偏諱を受け、藤孝と名乗り、天文二十一年(1552)従五位下兵部大輔に叙任される。永禄八年(1565)主君足利義輝が三好三人衆に討たれたあと、弟の義昭の擁立に奔走し、最終的に明智光秀を通じて織田信長に助けを求めることとなる。




## 三渕氏の由緒

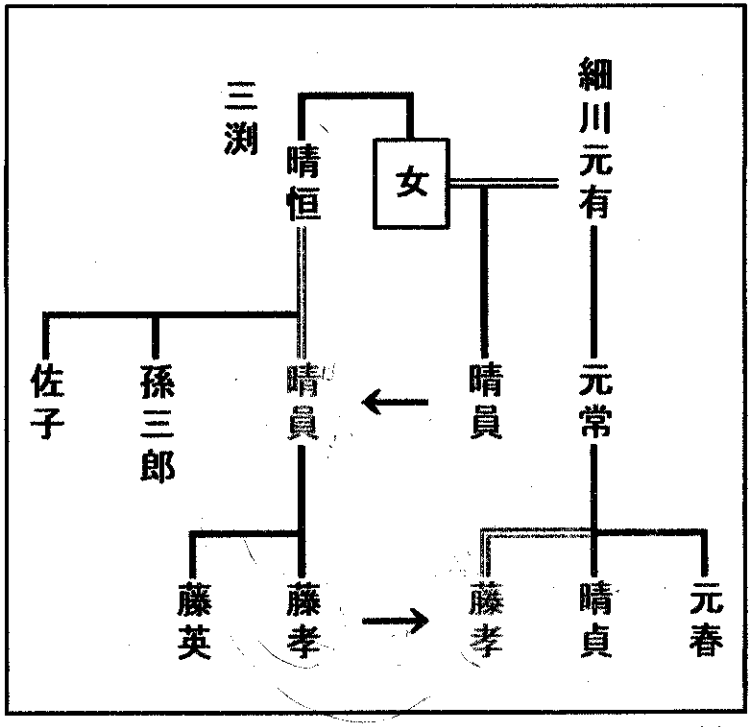
三渕氏の祖とされる**持清**は『寛政重修諸家譜』によると足利義満の庶子とされている。持清の名は、兄の義持から偏諱を受けたものとわかるが、信頼性の高い系図『尊卑分脈』には見えない人物である。当然、六代将軍を決めるくじ引きの際、持清の名はその候補者にはなかったことは事実であり、生まれたばかりの幼子であった可能性もなくはない。持清は後に引付頭人に任じられ、山城国三渕を領したことからその姓を名乗るようになったとあるが、現在この三渕がどの地域なのかは不明である。『系図纂要』もこの義満庶男説を踏襲しており、藤孝の実父晴員まで六代の系が記されている。ただ、これら系図の記載を裏付ける徴証はほとんどなく、全面的に信頼することは出来ない。一方で、室町中期以降、将軍家に仕える奉公衆として数人の三渕氏が史料に表れている。ただ『系図纂要』にはそれらを比定できる者は載っておらず、ひょっとして別系統の三渕氏の存在も考慮に入れるべきとも考えられる。

❖文安年間(1444～49)→**「三渕又二郎」**(文安年間御番帳)
❖長享元年(1487)→**「三渕次郎晴光」**(常徳院殿様江州御動座当時在陣衆着到)
❖延徳二年(1490)→真言宗寺院金勝寺東門院領地頭職**「水渕殿　御近衆也」**
❖延徳二年(1490)→**「三渕伊賀入道正運」**(伺事記録)

以上の史料から約一世紀にわたって幕臣の三渕氏が存在していたことは事実である。しかしながら足利家の血筋を引いているかについては俄かに信じることは出来ない。繰り返すが、始祖と思われる持清が系図史料以外に全くあらわれてこない上に、肝心の三渕系図についても晴員までの歴代数が多すぎる感がある。因みに、持清が尊氏の落とし子であったという説に従えば世代数はほぼ合致する。がしかしこの説も同時代史料に見えず、そもそも尊氏の落とし子などとは荒唐無稽と言うほかない。『姓氏家系大辞典』は、同時代に日野氏流の三渕を名乗る者が見えると記しており、ひょっとしてこちらの系統に属するものかもしれない。いずれにせよ、十五世紀後半になり、三淵氏は義晴との関わりを深め、彼の庇護と将軍擁立の功労によって急速に地位を高めた幕臣であった可能性が高い。

<u>実父三渕晴員の謎</u>

藤孝の父、三渕晴員は和泉守護家細川氏から三渕氏へ入嗣したという所伝がある。つまり、実父が細川元有で兄弟には元常がおり、養父の三渕晴恒は母方の叔父にあたるという。但し、これらは確実な傍証史料があるわけでもなく、加えて信用度が高い『尊卑分脈』等の細川系図に晴員は見えない。また、晴員は明応九年(1500)生まれとの伝承があるが、なんとその年の九月に実父であるはずの元有は戦死している。出生が先か戦死が先かは不明だが、生前より三渕氏への入嗣が決まっていたのであろうか。いずれにしろ、元有の最晩年の子であり、当然兄の元常との年齢差もかなりあり、そのため元常の子の晴貞と混同される場合もある。また『言継卿記』に晴員の実姉として登場する室町殿女房の清光院佐子局に関して、彼女と細川家との関係性を見出すことは出来ないので、佐子は三渕家の実子と見なして問題なかろう。加えて史料上、姉佐子局の記述の際、実弟とされる晴員の養子としての実態を匂わす記述がないことも気になる。いずれにしろ、これら史料から見えてくるのは、果たして晴員の細川家からの養子入りが事実であったかどうかは心もとないということ。案外、晴恒の実子と見なす余地もあるかもしれない。




晴員の通称は孫二郎であるが、同時期に晴員とは明らかに別人の「三淵孫三郎」という人物が史料上にあらわれ、将軍義晴の上洛後も播磨に残って赤松氏との取次を務めているなど、三渕氏当主として理にかなった行動をとっているのは見逃せない。『系図纂要』に「孫三郎」の記載はないが、仮にこの孫三郎が晴恒の嫡男であれば、そこに晴員という養子をあえて迎える必要性もないので、安易に晴員養子説を受け入れることは出来ない。因みに、晴員の嫡男と思われる三渕弥四郎藤英も、特に細川家との絡みが見えないのも付け加えておく。

このように同時代史料を細かく見ていくと、細川藤孝の和泉上守護細川への養子、及び実父三渕晴員がその守護家の出身で三渕家への養子であったという説、<u>実はこれらを裏付けるものが非常に少ないことがわかる。</u>

細川藤孝の出自はどのような経緯によって定説化されていったのか？
また、そこにいかなる系譜認識があったのか？肥後細川藩の動向を中心に時系列で追ってみる。

**【1】寛永十八年(1641)**　幕府は大名以下の系図集である『寛永諸家系図伝』の編纂に着手した。その際、幕府の編纂担当者であった太田備中守資宗は、当主の細川光尚(みつとし)に「細川幽斎(藤孝)の出自はなにか？」と質問した。それに対し、若い光尚は対応に苦慮し、まだ存命であった祖父忠興に依頼してほしい旨を回答。それを受け、忠興は「幽斎は、三渕家より出でたる者とし、細川伊豆とか細川刑部少輔とかいう者に養われ、将軍家の御供衆に列せられていた」との覚書を提出。その際、三渕家とは足利尊氏の「ヲトシ子」の子孫であることも紹介している。

**【2】寛永十九年(1642)**　肥後細川家は忠興の系譜認識を踏まえつつ、系図を完成させた。注目すべきは、藤孝の和泉上守護家への入嗣もさることながら、忠興以降を奥州細川家の系譜に繋げたことである。この辺りは怪しい忠興の証言を基軸として作り上げたものらしい。しかも養父と目された元有が没した三十四年後に養子の藤孝が生まれているという齟齬はシャレにならない。恐らくは、和泉上守護細川家ゆかりの文書などが、まだ肥後細川家には渡っていないため、歴代当主の年忌情報などを確認できずに創作してしまったのであろう。そもそも和泉上守護家との関係性を言い出したのは、この時が初めてなのだから、情報がないのは当たり前なのである。

**【3】"ばあや"の証言**　ここに別途、重要な証言が残っている。実は、忠興がこれらの証言に甚だ自信がなく、妹の浄勝院に確認したところ、浄勝院が**「しゆゑい」**という九十余歳の老尼(細川家に仕えていたばあや)に尋ねた際の覚書が残っているのである。彼女は「伊豆様とは刑部少輔様の父上であり、幽斎様にとっては祖父であります。二人の名乗り(実名)は覚えていません。刑部様は杉坂口で比類なき戦功を立てられましたが、よく覚えていません。当時、刑部様は五十歳くらいで、そのころ忠興様は九歳か十歳くらいだったですよ」と返答した。だが、この「しゆゑい」の証言は、『寛永諸家系図伝』には反映されなかったようだ。

**【4】延宝元年(1673)**　和泉上守護家ゆかりの文化財等がようやく肥後細川家へ譲渡される。仮に藤孝の養子入りが事実であれば、それらの譲渡が百年以上かかったことへの説明がつかない。このことは、当時藤孝と和泉上守護家が何ら関わりがなかったことを窺わせる事象である。恐らく「刑部少輔」と言う官途のみを手掛かりに創り上げたのであろう。但し、その際に忠興・しゆゑいが言う伊豆守については最後までその情報をつかむことが出来なかったため、無視せざるを得なかったことも付け加える。

**【5】天明二年(1782)**　細川重賢のもとで家譜の編纂に携わった小野武次郎景辰は『綿考輯録』を成立させた。重賢はこれを事実上肥後細川家の「正史」として承認した。武次郎は和泉上守護家ゆかりの文化財が提供する史的情報に基づいた検証を重ね、従来の元有養父説から元常養父説に修正した。それは年代的な齟齬があることと、元常も一時的に刑部少輔を名乗っていた時期があったことが判明したからである。ただ、さすがの武次郎も「しゆゑい」証言を「*細川伊豆などという人物は細川系図に見当たらず、いぶかしく候*」と取り上げなかった。

**【6】文化七年(1810)**　幕府から『寛政重修諸家譜』編纂にあたり新たに命じられた系譜提出の際、肥後細川家は正式に系譜修正の申し入れを行い、最終的に元常養父説への修正は認められた。これが近年まで通説とされる肥後藩細川氏系譜の公式見解となっている。

肥後細川家が提出したこの正式見解は、本当に正しいのだろうか？繰り返すが、和泉上守護家との関係性、三渕氏の信憑性、こころもとない養子説、など不可解なことが多いのも事実である。

## 実は“ばあや”の証言は正しかった！

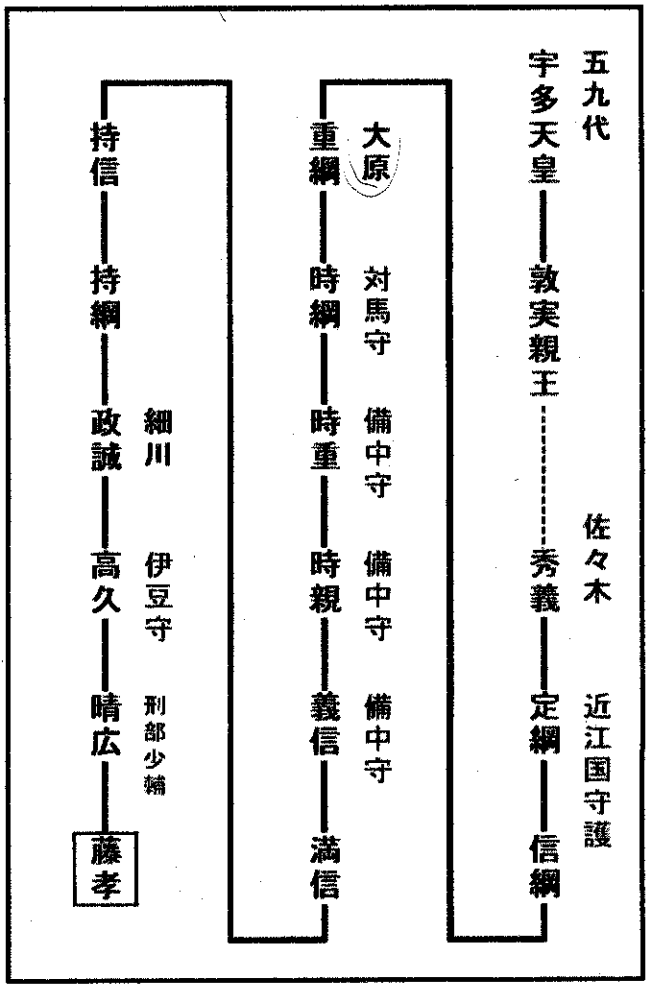
**『龍安寺文書』**(東大史料編纂所架蔵影写本)に藤孝なる人物が「*親にて候刑部少輔放状(はなちじょう)*」と言っている文書がある。大略すると、自分の親である刑部少輔が出した数十年前の「放状」があるので別儀ないと言っているのである。実は同文書にその問題の書状(放状)が収載されており、これにて刑部少輔の実名が**晴広**であることがわかる。となると、晴広を父に持つ藤孝は天文六年(1537)より数十年後に活動していた人物と見なすことが出来る。ではこの晴広とは何者なのであろうか。『藤井一司氏所蔵文書』(東大史料編纂所架蔵写真帳)には**“細川”刑部少輔**とあり、大永～天文年間(1520-50年代)に足利将軍家に仕えていたことが確認でき、放状の花押とも一致する。したがって、細川を名乗る刑部少輔は実名を晴広といい、彼を親に持つ藤孝も当然細川を名乗っていた可能性は非常に高い。加えて、晴広の活動時期を踏まえて勘案すると、この藤孝は一般的に知られる細川藤孝以外には考えにくいという結論に達する。

さらに『鹿苑日録』天文十二年条に「*細川豆州高久、同息刑部少輔殿*」とある。豆州は伊豆守のことであるから、晴広の父が伊豆守高久であることが判明し、

**細川伊豆守高久 ― 細川刑部少輔晴広 ― 細川藤孝**

という親子関係が想起できることになる。そうなると、忠興及び老尼「しゆゑい」の言う「伊豆様は刑部少輔様の父上…幽斎様の祖父」という証言は正しかったこととなる。やはり、**ばあやの記憶に間違いはなかった。**因みに藤孝の実父である晴員と、養父晴広及びその父高久は、同時期に将軍家に仕えており、同僚の間柄でもあった(『大館常興日記』『言継卿記』)。したがって、幼少の藤孝が晴広のもとで養育され、長じて養家の名字を名乗ったとしても不思議ではない。それに反して、細川元常養父説は、元常に実子元春・五郎晴貞がいることから不自然であり、仮に入嗣が事実であったとしても、その後藤孝が守護家の一員としての痕跡を残していないのは不審である。さらに元常は「しゆゑい」の言う杉坂口での戦功とは全く関係がない。

では、高久等が名乗る細川はどの系統の細川なのであろうか。設楽薫氏は、高久の父は近江佐々木源氏の一族である大原氏出身の細川政誠であると指摘している。政誠は八代将軍義政の寵臣であり，管領家細川氏の庶流淡路守家の猶子となる形で義政から「細川」名字を賜与されたという記録がある。晴広が細川淡路刑部少輔と称していたこともその傍証になっている。したがって、藤孝の名乗った細川とは、和泉上守護細川家とは何ら血縁関係のない佐々木氏系大原氏を出自としているということになる。また、さらに決定的とも言える『鹿苑日録』の記述がある。そこには「細川豆州孫熊千代殿」とあり、これは藤孝その人が熊千代と名乗ったと解釈出来るのだが、実は藤孝嫡男忠興及びその嫡男忠隆も同じく幼名が熊千代である。このことは、細川伊豆守から藤孝を経て忠興、忠隆までの系譜の連続性を証している情報と言える。



## 定説となっている藤孝の出自が怪しいこれだけの理由！

**①実は誰も知らなかった**

そもそも、細川忠興晩年の頃、先代である藤孝出自の詳細を知る者は、忠興と“ばあや”以外にほとんどいなかったという事実は確かに不審である。さらに、この家がなにゆえ細川と名乗っているのかを認識している者もいなかった可能性もあり得る。そう考えると、ひょっとして細川と名乗ってはいるが、足利一族である名門細川家に繋がる家ではないことを藤孝一家は薄々知っており、その為、出自だとか系図だとかをあえて語ることはなかったのかもしれない。

**②細川姓への執着心がない**

藤孝は将軍義昭を見限り、信長に仕える際に細川から長岡へ一時的に変姓している。このことから、藤孝自身がそれほど細川姓に執着していたとは思えないことが窺える。仮に自家が由緒正しく権威のある姓であると認識していれば、そう簡単に変姓するはずがない。また息子の忠興も、前述した小野の覚書に「*殊に忠興様は御系図躰之事一向に御かまいなく、信長秀吉之時先祖之訳なと申儀更々無之、いかなる下賤之者たりとも其人によって被召仕候ゆえ…*」とあり、系図などどうでもよく、信長秀吉の頃はたとえ下賤の出であっても本人が優秀であれば、召し抱えられたと言っている。このように藤孝･忠興父子の、みずからの出自に対する認識度は非常に低く、逆にこの時点で、あまり世間に誇れる家系ではないことを十分に知っていた可能性も考えられる。こうした忠興の認識が影響したのか、藩の「家史編纂」はなかなか進捗しなかった。また、記述内容にも確実性がなかったのであろう。

**③編纂者の苦悩**

『綿考輯録』編纂担当の小野武次郎の数点の覚書が永青文庫に残っている。その中の『密意之覚』に寛永のころを振り返り「*藤孝様は元有様の御養子、又元常様の御養子と申所わかりかね、いろいろ御吟味之上元有様御養子と御書出に相成候儀…*」とある。最後まで藤孝出自の確実な情報が得れなかったことへの苦悩を吐露していたことがわかる。

**④謎の三渕氏**

一世紀の間、幕府の奉公衆として史料にあらわれている三渕氏であるが、始祖の持清からの系譜は『系図纂要』に記載があるだけで、もちろんそれを裏付ける徴証はない。肥後細川家もその辺りが気になったのか、今度は晴員を和泉上守護家からの入嗣であると、後付けで言いだした可能性がある。つまり、間接的に藤孝は名門細川家の血を継いでいるとした。ただ、そうなると史料上では晴員の実姉といわれる佐子局が果たして細川家の出かと言えば、そことの関係性が全く見いだせない。ここに晴員の養子説の危うい状況があるのだが、このあたりを肥後藩はほとんど触れていない。

**⑤名門細川氏の関係史料にまったく登場しない**

和泉上守護家に入嗣した藤孝、三渕氏へ養子に出た晴員ともに、江戸期以前の『尊卑分脈』細川氏系図などにその記載はない。また『寛永諸家系図伝』などに忠興が奥州細川家の輝経を継承したとの記述があるが、その趣旨は今一つ不明である。加えて、これも同時代史料からは確認することが出来ない。

**⑥忠興の証言に裏付けされるもの**

忠興はその証言の中で、伊豆及び刑部少輔は将軍家の御供衆であったと言っている。この「御供衆」とは室町幕府における家格秩序において、和泉上守護家の「国持衆」に比べ各段の差がある家格といっていい。一方で、細川高久・晴広が継承した淡路守護細川家は「御供衆」に比定される。このことも、藤孝養父が細川晴広であった蓋然性を高めている。

## 結語として

以上、様々な同時代史料を検討してみると、**肥後熊本藩五十万石の家祖である初代藤孝の養子先は、和泉上守護細川家ではなく、御供衆でありながら細川を名乗ることを許された佐々木氏流大原氏であった可能性が非常に高い。さらに『兼見卿記』文禄三年の条に「*幽斎、自出生、細川刑部少輔為養子*」とあり、生まれてすぐに養子になったと直訳できる。憶測を重ねれば、藤孝が晴広の実子であったことを暗に伝えていると考えられなくもない。**現在細川藤孝及びその一族について、和泉上守護家の名跡を継いだとする内容の書物がほとんどで、これが世間に完全に浸透している。因みに、第七十九代内閣総理大臣細川護熙氏はこの旧熊本藩主細川氏の出であり、「生き残っている数少ない清和源氏の名家」と自他共に認めておられる。しかし、想定した通り、藤孝が佐々木流大原氏の出であれば、この主張は大きく崩れてしまうことは明白である。いずれにせよ、現在我々が認識している定説とは、藤孝存命中に言い伝えられた確かな情報をもとにしていると思いがちだが、実は同時代の史料は非常に乏しく、ほとんどが江戸期以降にその子孫・家臣たちによって創り出された説に過ぎないのである。そして、この状況は決して細川家に限ったものではない。

加えて、江戸時代に諸大名から提出された系譜をもとに幕府が行った二大系図集『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』の編纂事業は類を見ない一大イベントであったと考えられる。その際、系譜提出を迫られた藩の中には、細川家同様、出自が明確でない藩祖を抱えている家が存在していたことも事実である。また、江戸中期以降は藩祖顕彰の動きが高まりつつあり、そのため立派な出自を示す必要があった。

したがって、細川家以外にもまさにそういう状況下で家譜を創り上げ、安易に足利一族に系を繋げてしまった家がある。徳川四天王の一人、榊原康政の**榊原家**、京都所司代板倉勝重の**板倉家**などがその最たるものであろう。榊原氏は、伊勢守護の仁木氏の後裔と称し、板倉氏は足利御一家の名門渋川氏の後裔と称するが、その系譜を検討すると俄かには信じられない部分が多々ある。始祖からの詳しい系図は残っているが、彼らが世に出る前の世代はいかにも心もとなく、後付けで繋ぎ合わせた感があり到底信用できない。これらもやはり始祖の出自があいまいで、確実な同時代史料がなかったものと思われる。ただ、絶対にありえない系譜か？といえば、それを徴証する史料も同様にない。そうなると何が史実かを見極めるのはなかなか困難と言わざるを得ない。

参考資料　設楽薫『足利義晴期における内談衆の人的構成に関する考察』遥かなる中世19号
山田康弘『細川幽斎の養父について』日本歴史930号
金子拓『室町幕府最末期の奉公衆三渕藤英』東京大学史料編纂所紀要12号
土田将雄『細川幽斎の研究』『続細川幽斎の研究』
森田恭二『和泉守護細川氏の系譜をめぐる諸問題』人間文化学部研究紀要2号
山田貴司『和泉上守護細川家ゆかりの文化財と肥後細川家の系譜認識』